

どっこい生きてます!



実りの秋を迎え、鹿嶋地域の田んぼも黄金色に染まった稲穂が頭を垂れ、あちこちでコンバインによる稲刈り風景が見られた9月20日、潮騒ジョブトレーニングセンターでもデイケアの仲間達が北浦にほど近い潮騒水田で手刈りによる稲刈り体験をしました。農業隊の指導により5月初めに自分達が手植えたもので、ここで獲れた美味しいコメは施設の食堂でデイケアの仲間達に供されます。

2017

9

千々に乱れた私の心も 少しずつ秋空のように…



秋も本格化してきました。これからは潮騒 JTC にとって1年で最も多忙な時期となります。初回から参加している「回復の祭典・リカバリーパレード」(第6回目、東京)に始まり、地元で開かれる各秋季祭りイベントへの参加、そして最大行事である潮騒 12 周年フォーラムへと続きます。特に今回のフォーラムではリカバリーパレード実行委員会などの協力を得て、従来の室内催事にとどまらず鹿嶋市内の目抜き通りをパレードする計画です。ヤク中、アル中、ギャンブル中毒者(私達は依存症者と叫びたいのですが…)にも回復の機会と権利を、と地元から声を挙げます。「書を捨てよ町に出よう」(寺山修司)ではありませんが、施設内で縮こまっているだけでは埒があきません。私達は声高に権利を主張するのではなく、分相応に抑制的かつ謙虚に自分達の窮状と回復の権利を訴えたいのです。潮騒初の、この試みがうまくいくかどうかは分かりませんが、歳はとつても私の中にチャレンジ精神の灯火が消えることはありません。

でも、実のところ本音の一部で「弱音」を吐く自分がいます。とりわけ今年は春ごろから順調な歩みをしていたスタッフが転んでしまい(=スリップ)、信頼していた何人かが潮騒を去りました。私達にとっては回復への不可避な道程と考える、このスリップ問題に端を発して、理解ある有力な支援者と思われた地元のサポーターも失いました。さらにピンチは続き、施設運営に新たな展望をもたらすとして水面下で進めていた関係機関との事業提携に向けた話が破断し、潮騒の活動を評価してくれていると思っていた団体からは、私達の回復支援のあり方に疑念を差し挟まれたりする事態が相次いだのです。さすがの私も「なぜにこうもハイヤーパワーは私達を試し、苦しめるのだろうか」と落ち込み、いつになく心が千々に乱れました。私は毎晩、黙想して一日を振り返るのですが、うまく感情をコントロールできずに「こんな時に一発打てばすっきりするだろうなあ」という衝動に駆られた場面が何度かありました。

でも、よく考えれば「世間は どうして分かってくれないのだろう。私達は金もうけのために活動しているのではない。苦しんでいる人のためなのに」と、自分を棚上げて問題を外に向けていること自体がアディクト(依存症者)にとっての危機なのです。こうしたピンチの時こそ、私達は原点に戻ることが大事となります。私達アディクトは「失うものは何もない」「天は自ら助くる者を助く」が信条です。当事者主義の原則に沿って、できるだけ余計なものは背負わずに自分達を信じてシンプルに回復の道を生きていくことがすべてです。そう考え、時間をやり繰りしては仲間の輪に入って日々のミーティングに参加すると、不思議な事に心が落ち着き、怒りや恨みの感情が癒えていったのです。この病気の宿命として、アディクトにはいつ魔の手が入り込むか、誰も予想できません。でも、私達にはハイヤーパワーと回復プログラム、そして仲間の存在があり、これらを信じ、身を委ねることで、転んでも再び起き上がれるのです。おかげ様で、私の心も少しずつ秋空のように晴れ渡ってきました。(センター長 栗原 豊)



農業隊 収穫期リポート

▲農業隊メンバーが常陸大宮市で藁加工に取り組む篤農家を訪ねて研修を受けた

～潮騒のマンパワー活かす「稲わら天日干し加工」に初チャレンジ～

季節は実りの秋。農産物の収穫時期とあって農業隊にとっては1年で最も忙しい時期です。潮騒農業にとっては今年初めての取り組みが多くなり、また農業隊メンバーも約30人規模にまで膨れ上がっています。その半面で、重複障害など難しい問題を抱え、スリップや入院を繰り返す仲間も増えています。コメ作り(稲作)の取り組みでは、水田の耕作面積が約3町5反歩(約3.5ヘクタール)と大規模農家をしのぐ勢いで増えています。入寮者の増加によって、当初の計画通りでは施設での自家消費分を賄えなくなった事が増産の理由です。現在も施設が拡大しているので、来年は4町歩にまで作付面積が拡大するでしょう。

振り返ると、今年は春先の水苗床作り・田植えの大事な時期に、コメ作りリーダーのヒコさんのスリップがあり、スタートから農業隊の力量が試される事態に遭遇しました。代掻き、田植え、水管理、農業調整など、それなりに今までやってきたとはいえ、改めてこれら一連の作業がいかに大変で難しいかを思い知り、ヒコさんの苦労を実感させられました。これと並行して畑作も青パパイア、サツマイモ、ジャガイモ、タマネギ、季節の野菜作りにも取り組み(総面積は約1町歩)、施設が営む潮騒食堂「おらげのかまど」から出る生ごみを利用しての堆肥作りも本格的に始まりました。このほか、農業に付随する軽作業、剪

定、除草、引っ越し等も例年通りにこなしています。

こうした多忙な作業日程の中で、今年が目玉とも言えるプロジェクトが始まりました。茨城名産の、昔ながらの製法による「わら納豆」に使う藁(わら)が不足している状況を受け、自分達も藁を取り、天日乾燥による加工作業に取り組む事になったのです。潮騒農業もこれまで作物の保温用など畑で使う分だけ少量の藁を取り、あとは破棄処分していました。今回の取り組みは、これを有効利用しようという“もったいない精神”あふれる栗原センター長のアイデアに起因しています。

加工作業に先立って先進事例に学ぼうと、まず常陸大宮市で今も藁加工に取り組む篤農家を訪ね、ノウハウを教えてもらう研修を受けました。昔からのおだかけ、天日干しの手作業にこだわり、あえて機械化に頼らずに自然の恵みを最大限に生かした「美味しいコメ作り」に励んでいるのですが、やってみるとこれが大変な労働力と手間が掛かかります。昔の農家の偉大さを実感させられると同時に、「これは潮騒のマンパワーを活かせるのではないか？」という手ごたえとヒントを得る事が出来ました。その報告は次号で。乞う、ご期待！(農業隊リーダー：ヒコシ)

※わら納豆＝藁で出来た筒状の容器(藁づと)に入った納豆。パックに比べ納豆の水分を適度に吸収するので程よい歯ごたえを楽しめる。土産物としても根強い人気商品。



デイケアの仲間が潮騒水田で稲刈り体験 手刈り作業で農家の苦労に思いを馳せる

本号表紙のように、潮騒水田でデイケアの仲間達約40人が参加して稲刈り(手刈り)体験を行いました。ゴールデンウィーク期間中の今年5月初めに、自分達が手植えによる田植えをした稲(コシヒカリ)です。夏場には農業隊が水管理や除草作業をして下支えた結果、見事に成長し黄金色に実りました。

潮騒 JTC では独自の就労支援策として農業にウエートを置き、特にコメ作りでは施設内での完全な自給自足を目指し、年々耕作面積を広げています。今では大規模農家も顔負けの作付面積を手掛けていますが、これとは別にデイケアの仲間達に自然との触れ合いながら農業を実体験してもらうプログラムを組み込んでいます。この日の稲刈り作業は午前10時頃から約1時間半ほどで終わりましたが、デイケアメンバーが真新しい稲刈り用の鎌を受け取り、熱心に手刈りに励みました。

作業に先立って農業隊リーダーのヒトシさんが「コメ作りは八十八の大変な手間が掛かると言われます。農

家の苦労に思いを馳せてください。いつもの室内でのミーティングとは一味異なり野外での稲刈りプログラムなので、けがをしないように。マムシにも気を付けて」と注意喚起し、農業隊メンバーが稲の借り方を手本として示し、一斉に稲刈りに移りました。素足で田んぼに入る仲間や器用にかまを使いこなす仲間もいて潮騒らしい稲刈り風景となりました。

途中、コメ作りリーダーのヒコさんが運転するコンバインが田んぼに入り、仲間達が刈ったばかりの稲の束をスピーディーに脱穀していきました。稲刈り終了後にはお弁当が配られ、田んぼ脇でみんなで美味しくいただきました。若手のメンバーは「自分達が田植えし、稲刈りして収穫したこのコメを早く食べたい。さぞうまいだろうな」と感想を漏らしていました。ヒコさんは「このコメは地下水をくみ上げているので、他よりもうまい。みんなが汗を流したので今年も豊作だよ」と太鼓判を押してくれました。(潮)



依存症の実態と回復支援活動に理解深める ひたちなか市の地域団体が研修で来訪

ひたちなか市内で地域活動を展開している「一中地区地域のふれあいを広める会・福祉部会」(大内由利子会長)の一行約25人が9月14日午前、デイケア施設のある鹿嶋市宮中の潮騒アディクションビレッジ会館に視察研修で来訪され、体験メッセージや映像を通して依存症の実態や潮騒 JTC の回復支援活動について理解を深めていただきました。

同会はひたちなか市立勝田第一中学校区内の地域活動を行っている団体です。同市及び関係自治体の財政・人的支援を受けて体育・文化・青少年・環境・福祉などの部会で構成され、幅広い分野で活動をしています。福祉部会では今回、深刻化している薬物汚染の低年齢化の動きを受けて、今後予定する子供達の薬物乱用防止対策への取り組みに向けてヒントを得るために施設見学を兼ねた研修で来訪されました。

この日、一行は約1時間余りの短い滞在時間でしたが、体験講話や潮騒の紹介映像を視聴した後、熱心に

質問をしていました。ミニ講話では、若くして薬物・アルコール依存症で苦しみ矯正施設の体験を持ちながらも潮騒で回復し、今では30歳の若さでデイサービス百寿亭の代表の重責を担うマコトさんが自身の体験を通して依存症の実態を力説しました。また、栗原センター長も通算7回・約20年に及ぶ刑務所体験を経て「世界で一番大切な娘を泣かせながらも覚せい剤とアルコールをやめられなかった」と依存症回復の難しさをリアルに語りました。

最後に大内代表は謝辞で「短い時間の研修ながらも貴重な体験ができました。これを教訓に薬物乱用防止活動により一層力を入れます」と成果を話してくれました。潮騒では研修で来所して頂くだけでなく、要請があれば薬物やアルコールの再乱用防止に向けた当事者のメッセージ活動に積極的にボランティア活動として出向きます。どうか、私達のマイナス体験を社会資源として有効利用してください。(潮)

近藤恒夫
インタビュー
~ダルクの32年・逆説の人生に光を求めて~

ダルクは特定のグループに
へつらわないで来れた



連載
第3回

「中立っていいな!」と
俺達は実感できた

—前回、当事者活動を基本とするダルクの話が尻切れになったので、近藤さん続けてください。

近藤 ダルクは当事者活動であり、ある意味草の根運動なんだよ。しかも、よくある本部と支部の関係は取らない。上意下達の命令系統ではなく、それぞれが独立して、好きなようにやっていくのがいい。均質化するのはいけない。どこかに従属したり、支配されたり、依存してはいけない。あくまで平等で、水平の関係だね。だからニーズがあればアメーバのように増殖していく。面白い事にスタッフは潰れても、これまで潰れたダルクはなかった。

—あくまで近藤さんは、ニュートラルな立場で回復の道を目指してきた訳ですね。

近藤 ダルクはどこにも帰属しなかった。どこかの組織に入ったら、違うどこかに恨まれる。活動の範囲も狭まる。失敗すれば誰が責任をとるの?となる。そうした不毛な議論になって終わってしまうのがオチだよ。だからダルクはしがらみがないところが良かった。司法にも警察にも、どこにも巻き込まれないで生き延びてきた。もちろん医療にも包含されなかった。ダルクがどこかに頼って「助けてほしい!」と通報したかといえば、どこにも通報しなかった。非力だけれども、なんとか自分たちでいろんな問題を解決してきた。そういう自負が俺達にはある。だから「中立っていいな!」と実感できた。

そりゃ世の中、どこかに頼ったほうが楽だよ。でも、俺達はそれをしなかった。ある時には味方に思っていた人

達を敵にまわしても、そっちにはなびかなかった。「どんなに困っていても、どんなに貧しくても、自分達で何とかしよう、ダルクの魂は売らないぜ!」という意地かな。かつこよく言えば、ある種の矜持(=プライド)みたいなものがあった。「俺達には当事者グループがあるんだ!」「仲間の強い絆に支えられているんだ」「自助グループ(NA)があるんだ」という思い、その手ごたえに支えられてきた。これがあつたから、ダルクは特定のグループにへつらわないで来れたんだ。

ダルクは歪んだしがらみで
徒党を組んだりしない

—近藤さんが以前に、「俺は人を管理するのも管理されるのも嫌だよ」とおっしゃった意味合いが、それを象徴していますね。

近藤 もし、ダルクが他のグループや組織と同じ体質だったら、(有名な)だれだれ先生とか、(世話になっているからと)特定の利害関係者とかに顔色を伺ってなびいていたと思う。世の中には、そんな風に卑屈なほど媚びへつらうことで延命している団体はたくさんある。でも、ダルクは平気。もともと失うものなんて何もないからね。だって外国に行ったらそれが当たり前なんだ。お互いが面々の計らいでやるのが常識だから、そんな歪んだしがらみで徒党を組んだりもしない。他人の目線や評価を気にしてグループ分けや仕分けなどしない。そうする必要がないんだ。だって、海外では「あなたたち自身が必要だから、ここに来ているんでしょ」というのは常識だから。立場の違いなんて関係ない。逆に「なんで分けちゃう

の?」と不思議がられるよ。「国立大学の先生だったら特別に案内する?」。そんな発想はセルフヘルプではもともとありえないから。

——それはもう自助グループ文化の厚みの違いですかね。その差は決定的かもしれませんね。

近藤 俺も海外のセルフヘルプグループを見たり、研修したりしてきたから、それを実感するね。欧米に比べると、日本はだいぶ遅れた歩みだと思う。まあ、その分だけ伸びしろは大きいかもしれないが…。

NPO ができてから ダルクはどんどん骨抜き状態に

——ところで依存症は人間関係や物質に対するコントロール障害の側面を持つだけに、ダルクを巣立った回復者が、いかに自立した人生を手に入れるのかはとても難しい問題です。若いリーダー達も施設運営には苦労しています。これは偏見かもしれませんが、ダルクの第3世代というか若い人達には、既にレールが敷かれてそういう近藤さん達のような苦労がなかった分、ストレートに行政になびく傾向がみられませんか?

近藤 それが一番危ぐする事かもしれない。なんたって行政のほうが頭がいいからな。相手は高学歴のエリート職能集団だからね。もしダルクがそうした土壌に上がったらどうなるか? ひとたまりもないわな。何よりも大事なダルク自身のプログラムが変わっていく可能性がある。俺から見れば、NPO ができてからダルクはどんどん骨抜き状態になっているように思える。そういうところに行ってしまうのは、俺にはとても危険な兆候に思える。まあ百歩譲って、行政とかとの話し合いが得意な人にはいいかもしれないが…。今の人達が行政好きかどうか分からないけど、そんな方向にしか行かないというのは、ダルクをつくった俺としては何とも歯がゆいというか、やり切れない思いもあるな。

その流れで行くと、次は「じゃあ、国でこのようなことをやりますから」「(松本俊彦さんの開発した)スマーブをやります!」となるのは、ある意味で必然だよな。そうして「ダルクの皆さん、一緒にやってください!」と誘い水向けられる。そこまで行くと「私達は12ステップがありますから、いいです!」とか言えなくなってくる。そんな巧みな演出? によってNPOの衣をまとったダルクは、知らず知らずのうちにコントロールされやすくなっているんだろうな。——そうですね。でもその根本には自助グループとは異なる社会の中間施設としての施設運営という宿命的な問題があります。避けられない運営費の問題が横た

わっています。いくら志が高くても独立ダルクの旗を掲げても、実際には施設運営にはお金がかかりますからね。綺麗ごとではやっていけない。

近藤 それはそうだな。

潮騒は中立なはずの行政からも 偏見を持たれていた

——栗原センター長の場合は、仲間だったダルクからはしごを外されて孤立無援の中で「よ～し、それなら誰もやっていないダルクをつくるぞ!」と腹を括った訳ですよね。「俺の流儀で、昔取った杵柄でやるぞ!」と。

栗原 そうですね。私の場合は、結果的には誰にも頼れない状況だったことが、良かったのかもしれませんが。頼れる環境や人間関係が全くなかったから、自力でやるしかなかった。当時、困難な状況を突破できるなんて確信はなかったけど、「ここでへこたれる訳にはいかないぞ!」っていう反発心だけでしたね。

近藤 いいんじゃないか。そういう反発心が大事なんだよ。逆境を切り開くようなパワーだね。物事は、なびくばかりが能じゃない。長いものには巻かれない反発のエネルギーが新たなダルクを切り開くってこともある。ユタカはそれでいいんだよ。

栗原 先ほどの問題に関係しますが、私が懸念したのは当初、どこにも誰にも相手にされない状況が続いたから、「行政の後押しが欲しいな」「運営も楽になるのにな」となってしまう事でした。苦戦が続いて「自分達の魂を売り渡しても…」と弱気になった場面もありました。何しろカネもノウハウも人脈も支援も何もない状況でしたからね。でも、そうした中途半端な気持ちだと行政にコントロールされるだろうな、という気持ちもありました。幸いな事? に当時の行政はまったく潮騒を相手にしてくれませんでした(笑)。当時はオウム事件の余波で、「潮騒は得体の知れない団体だ」なんて、本来は中立なはずの行政からも偏見を持たれていましたからね。

そうした追い込まれた状況の中で打ち出した就労支援に特化したダルクを目指す方向性も、勝算があった訳ではありません。ただ、誰もやっていないから何ら気兼ねも遠慮もいらなかったのは確かです。試行錯誤しながら少しずつ自分達の施設イメージを膨らませて、ひたすら夢を追いかけている感じだったですね。近藤さん得意の妄想を私が勝手に描いて、それをスタッフに促す形でやってきました。だから当時からのスタッフには、いまだに苦労を掛けて申し訳ないという思いが強いです。

(司会進行・広報部、次号に続く)

2017 シリーズ企画

潮騒ジョブって
どんな
施設なの？



その6 中ナイトケア施設

本部機能は短期間ながら潮騒の助走期間を支える

前回紹介した下津ナイトケア施設が、NPO 法人に衣替えした潮騒 JTC の発展期 (今もその延長上にあります) を象徴する関連施設なら、その前に仲間達が回復生活の拠点とした鹿嶋市郊外の農村部 (中地区) にある現、中ナイトケア施設は、潮騒の助走期間に位置づけられる施設です。実質 1 年 4 カ月と本部施設としての活動期間は短かったものの、ダルク関連施設として自立していく流れの基礎を形づくった関連施設です。

中施設は鹿島ダルクから独立する形で、鹿嶋市役所前のアパートで産声を上げた潮騒 JTC の前身「鹿嶋潮騒ダルク」が草創期の苦境から脱した 2008 (平成 20 年) 8 月、入寮者の増加に対応して開所しました。「当時、私はこの建物の道路を利用して鹿嶋市役所前の施設に通勤し、毎日空き家だったこの物件を見つめては施設として使えたら、と考えた。そこで思い切って、ダメ元で所有者に電話したら OK となり、運よく入手できた」と栗原センター長。元クリニックだっただけにミーティング室や談話室、事務室、居室 (相部屋) などが確保でき、定員が 20 人ほどでダルク施設としてうってつけだった。一般にダルクは同程度の小規模運営が基本なだけに、相応しい器を得た栗原センター長は「以前のアパート時代は落ち着いたミーティングができにくかったが、これでやっと施設らしい活動ができると意欲に燃えた。今もスタッフとして活躍する仲間が回復者として成長していった」と振り返りました。折から潮騒が民法テレビの報道番組で特集された事から、その後も入寮者が増え続けました。間もなく手詰まり状態となり、2009 年暮れに開所した下津施設

の脇役施設となりました。

中施設は県道 242 号 (銚田鹿嶋線) 沿いにあり、入り口脇の扉には「薬物・アルコール依存回復施設 潮騒ジョブトレーニングセンター」の看板が掲げられています。理不尽な経緯から「ダルク」の旗を降ろさざるを得ない状況下に置かれた潮騒が、ダルクの「出口問題」を先取りする形で就労支援に特化する施設に衣替えした、エポックとなる施設 (木造平屋建て約 200 平方メートル) でもあります。また、NPO 施設にリニューアルする大切な準備期間を担った施設ですが、日々小さなトラブルが絶えない潮騒の中でも、中施設には依存症施設に特有な多種多様な問題が持ち込まれ、その運営スタイルを巡って栗原センター長が最も心を砕いてきた施設です。一時期は薬物やギャンブル依存症者らに絞った運営時期もありましたが、他に比べて回復者がなかなか生まれにくい状況が続いてきました。

そうした試行錯誤の流れを経て現在は、50 代のジョーさん (薬物依存症者) をリーダーに若い仲間から年配者まで 17 人が暮らしており、アルコールや薬物、その他複合的な依存症者を受け入れるナイトケア施設として機能しています。ジョーさんによれば「少し前まではスリッパ者が続出して大変だったけど、今は比較的落ち着いています。基本、寝るだけの施設ですが、みんな和気あいあいとアットホームな良い雰囲気です」と話してくれました。今後の方向ですが、刑の一部執行猶予対象者の専用施設として想定される、隣の行方施設の利用形態と絡んでまだ流動的な要素があるようです。

館山 G フェローシップ

イベントは参加することに意義があると実感

アルコール依存症の仲間達が集い合う恒例の「AA 館山グループフェローシップ」が7月1、2日に一泊二日の日程であり、潮騒の仲間2人と参加してきました。今回、このフェローシップイベントに参加して私は思いました。今まで自分は酒におぼれて、何をやる気も失せていましたが、運よく中間施設の潮騒 JTC にお世話になることができ、私の人生にも光が差し込んできました。潮騒でいろんな回復のプログラムに取り組んでリハビリを続けていたら、なんと頑張ってみようという前向きな気持ちが芽生えてきたのです。

このようなフェローシップイベントにも、これまでだったら参加しなかっただろうと思います。でも今回は、自分の中で何かが変わっていました。霊的な目覚めというには大袈裟ですが、なぜか積極的に参加してみようと思ったのです。実際、自助グループの仲間達との交流を深めながら、いろいろやってみて「こういったイベントは参加することに意義がある」と思い知りました。(まさお)

ピアサポ祭り

リカバリー仲間と霊的な再会が

一昨年ピアサポ祭りに参加させて頂いた時とは違い、今回(7月30日)は裏方として会場に行きました。潮騒フォーラムのチラス・潮騒通信を受付奥のブースにセッティングし、お弁当の準備などをしていると、新宿リカバリーパレードの仲間が早速声を掛けてくれました。「ブーちゃん、こっち側にこうやって置いたほうがいいと思うよ!」…なんて具合に。残念ながら仲間とゲストさんのお話は聞けなかったのですが、霊的な再会があったのです!

6年前…東京のとあるアルコール病棟で、私は自治会長・彼は副会長を担っていました。就寝前のロビーで患者が集まり、お茶会の席で彼とこんな話をしました。「退院したら自助 G セミナー・フォーラムなんか、俺たちに関係ないよな!」「そんな暇あったら、仕事してるぜ!」…正直、私はそう思っていたのですが、彼は違っていたのかもしれない。ピアサポの入り口前で彼は、「俺たちはアル症。こういう会場には様々な障害や依存症者・そして、ご家族が参加しているよね。何となく来ちゃうんだ。」と淡々とした表情で私に言ったのです。ステップ1とステップ12の姿勢を改めて感じました。ハイヤーパワーの計画のもとの再会に感謝です。

えいの退寮記

9カ月の最短ペースで円満退寮に

私は覚醒剤取締法違反で三度目の刑務所を出所し、潮騒ジョブトレーニングセンターに入寮しました。今までに刑務所を出る都度に2度と薬には手を出さないと決心し出所して来るのですが、気がつけばまた戻っています。正直に言えば、ダルクに来ては止められるなどと思っていませんでした。ところが不思議なことにこの施設にいた9カ月間はクスリに対する欲求が全く入らないのです。それは自助グループ(NA)ミーティングの中に出てくる「12のステップ」を信じ実践してきたからだと思えます。この12ステップを信じ切っているからこそ回復したのです。そう信じています。私はこのほど9カ月という最短ペースで円満退寮することになり、社会復帰していきます。社会に出ても2度と薬に手を出すことはないでしょう。大切なのは「自分で理解している神(ハイヤーパワー)」を信じる事だと思えます。最後に仲間の皆さんに心からの感謝いたします。ありがとうございました。(えい)

夏祭り「入寮者交流会」

すべて成功裏に終えた事が本当に良かった

今まで色々な交流会に参加してきましたが、こんなに楽しく仲間同士で協力し合いパフォーマンスを行ったのは初めての経験でした。当初は、息も合わず何度も同じ事の繰り返しでした。前年度のクリスマス会は、審査もあって悔しい思いもしたため、今年は職員一同気合の入りが尋常ではありません。毎晩の様に練習に練習を重ね、本番ですべて成功裏に終えた事が本当に良かったです。潮騒の入寮者交流会は、とても楽しい雰囲気の下で行われました。また来年も参加するのが楽しみです。来年も今年以上に皆様に楽しみながら交流して頂ける様に頑張りたいと思います。最後に一言、言わせてください。潮騒交流会、最高!

12月のクリスマス会では「王者」としてお待ちしております(笑)。(ティサービス百寿亭スタッフ)



受刑者からの手紙

「学びは苦でなく喜び」の助言が 実感出来るように

シゲさんは潮騒にお世話になって2年になるのですね。“今日一日の積み重ね”で迎える事が出来るのは、シゲさんの努力と潮騒の皆さんのチームワークがあるからこそ、の2年だったのではと思います。これから先も5年、10年と続いていく事を願います。自分の近況に変化はありませんが、無事故、無違反の生活を1年半以上続けています。出所の日まで、とは言わず出所してからも続けて生活が送れるようになりたいと強く思っています。

作業のやり方にもコツが掴めるようになり、先輩たちのペースにもついていけるようになりました。溶接をした所の見た目も合格点が貰え、自分の技術が上がった事がとても嬉しそうです。先輩達のように早くキレイにしっかりと、溶接をやれるようになる事が今の自分の目標です。「学びは苦でなく喜び」とのシゲさんの助言が実感出来るようになりました。依存症から回復して社会で花を咲かせられるよう、今の気持ちを継続させて前を向いて進みます。シゲさんや潮騒の皆さんと共に、フラワーロードの花のように綺麗な花を咲かせたいです。(北海道 S・K)

自分が書いた文章を 何度も読み直していた自分がいた

「どこい生きてます」の7月号を読んでいる中で、私と同じ刑務所に入っている人がいたので、「経理課の人が手紙を書いて居るのかなあ？」と思っていました。でも、その刑務所名はここは違います。私と同じです。「この文章は、どこかで見た事があるなあ～」と思いました。その文章を最後まで読んでみました。すると名前は「イニシャル O・J」となっているではありませんか。「どこかで見た事のある文章だなあ」って、自分が書いた手紙です。もう、ビックリするやら、恥ずかしいやら、でした。自分が書いた文章を、何度も読み直していた自分って、何とも恥ずかしいものですね。

さてシゲさんは7月で潮騒生活も2年を迎えたのですね。おめでとう御座います。私の刑期も2年ですが、同じ2年でも、全然違いますね。シゲさんは1日1日、回復し続けて2年を積み重ねているのですね。正に「回復は力なり」ですね。私はまだ、そのスタートラインにも立てていないのだから、まだまだ先は長いですね。まあ、ゴールが有る訳ではないのでしょうけれど。「薬を止め続ける」という事に終わりは無いのですものね。来年の今頃には皆さんの仲間入り出来ていると思いますので、宜しくお願いします。(神奈川県 O・M)

少しでも社会人らしく全うに生きていきたい

月遅れのお盆も終わり、私の残刑も3ヶ月を切りました。私の近況ですが、仮出所の為の面接も仮面接も終わり、後は“本面接”を待つばかりとなり、毎日心配ばかりしています。一番心配なのは、“本当に仮釈を貰えるのか”です。もしも貰えるなら残すところは、“1カ月余り”と考えておりますが、如何なものでしょうか？少しでも早く出所出来ますように願っております。一日でも早く、潮騒ジョブに入寮したいと願っております。そして、色々と指導して頂ける事を願って、待っております。

私も今年69歳と年老いて来て「人生もいつか終わる時が来る」と考えております。その前に「少しでも社会人らしく全うに生きていきたい」と思います。出所したなら潮騒ジョブで生活する事、そして薬物(覚醒剤等)を止めて、もう二度と務めに來るような人生を送りたくない、と考えております。(東京都 T・S)

以前にも触れましたが、受刑者の皆さんに手紙を書く作業を担当しているのは、回復途上にあるスタッフです。この作業にも向き不向きがあるようですが、書き手の回復と成長に繋がっているのは言うまでもありません。過去のマイナス経験がこうした形で生かされるのは、当事者にとって大きな励みです。

常に感謝を忘れず 一日一日を大事に生活している

この暑い中、私も舎房に無い薬はほとんど飲まないようになりました。自分でも不思議なくらいです。このまま生活していけるよう頑張っています。シゲさんも好きだった酒を飲まずに頑張っているように、自分も頑張っています。シゲさんのように一日が終わって部屋に帰ったら、一日の反省と感謝の気持ちを寝る前に必ず頭の中で思い起こす作業、“事件の反省”も6年近くになります。感謝の気持ちを忘れるようでは、人間ではありません。“犬でも三度食事をやったら懐いて来る”と同じで、私もシゲさんと同じ気持ちで、“常に感謝を忘れず一日一日を大事に生活しております”ので、どうか安心して居て下さい。

そして一日も早く栗原センター長の講義を受けられたら良い、とっております。私の残刑も後1年ですので、シゲさんもその日まで私の帰りを待っていて下さい。それから運動会が10月4日と決まり、今若い人と走っております。60歳を過ぎてまだまだ、頑張っております。明日の為に、長生きしたいですね、シゲさん(笑)。それとシゲさんからの手紙が切られていたので、シゲさんが何か“変な事”を書いてしまい、切られてしまったのか…、と心配して親父にも聞いたのですが、官に他では「そのような事を遣らない」と言われました。私は変な気を回してしまいましたヨ！私に気を遣って余り余計な事は書かない様にして下さい。シゲさんに対して申し訳ありませんので、シゲさん有難う！もし私の友人が其方にお世話に成るようでしたら、仲良くしてやって下さい。宜しく願い致します。今の工場に来て一年が過ぎ、親父も変わり、来月は一年の「無事故表」が貰えます。ここに来て6年になりますが、「一年無事故表」が初めてなので、今の親父には感謝の気持ちを忘れる事無く仕事にも生活面にしても、“尚一層、頑張っています”ので、長い目で見て居て下さい。 (茨城県 H・N)

今は「目の前の事に 全力でやっつけていこう」と思う

当地では“9月の頭には”運動会が催されます。今、工場の皆と一緒に練習に励んでいます。私は50m走とリレーの選手になりました。応援団長にもなったので毎日四苦八苦ですが、運動会は1年に一度のお祭りなので「全力で楽しもう！」とっております。シゲさんも元気で頑張っているようですね。酒を断ってから2年経ったとの事、おめでとう御座います。広報の活動を始め色々な行事に追われながらも、2年間頑張って継続出来たシゲさんを、私も見習わねばと思います。私自身も依存症になってから社会では、1年と薬を断った事は在りません。“手を出してはいけない”と思ながらも、気付けば止まらなくなっている。2年続ける事の難しさ、私も理解しています。皆さんとこうして繋がる事が出来てから一年。回復を日々夢見ながら生きております。

潮騒通信7月号、大変嬉しく読ませて頂きました。栗原センター長と近藤さんの対談の中で、“底つき”と云う言葉が出て来ました。“底つき”しなければ、回復に繋がるのは難しい”と、良く耳にします。私自身、今「底つき」の状態なのかどうか、正直分からず、最近色々考えてしまい不安になる時もしばしばです。私の刑期も後2年、それから皆さんのお世話になりながら回復を目指す事数年、先を見ると本当に不安になりますね。でも、回復の道を頑張って歩かなければ、また“塀の中に戻る事に”と思えば、今は何が何でも「回復しよう！」という気持ちが湧き上がって来ました。自分なりの新しい生き方、潮騒に行ったら何事にも積極的に参加し見つけたい、とっております。

中でも“エイサー”は是非やってみたいです。俳句も、テレビを観ながら少しずつ勉強しています。12のステップを口ずさみ、イメージしながら、今は『目の前の事に全力でやっつけていこう』と思います。 (北海道 N・S)

しおさい、俳壇

9月のお題

稲刈り

選者 桐本石見

わが俳句人生の歩み・No.44

センター長 栗原豊

「さて、君が心配してくれている私の出所の事です、私が今頭の中で考えているのは、K市に在るマンションの管理人室を無料で借りることになっていて、入居するのに約1か月間の準備期間が必要なこと。仕事の件はまるで見当がつかない事です。他に友達にも住居と仕事を頼んでありますが、出所して確かめてみないと分かりません。出所後に向けて考えているのはこんなところですが、とにかく此の中にあつては社会との連絡が取れないので、なんともならないのです。此の中で考える事は自分の都合のよい願望や妄想ばかりで、実際に社会に出た時には何ら通じない絵空事であるのは、過去6回の受刑体験から身をもって十分に分かっているのです、なるべく考えなくしているのです。

さて君の言う施設(NPO法人アパリが運営する藤岡ダルク)の事です、私は過去一度もそのようなダルクという施設は利用した経験がなく、その方面についてはまったく無知です。もしもの場合には世話になるのもいいかなと思いましたが。なんとたつて刑務所から出て直ぐはほとんど“病人”ですからネ。私の身体は環境の変化になかなかなじめないのですヨ。此処三回ほどの出所では毎回、社会に慣れない此の期間の“病人”状態の内に「頑張らなきゃ」「頑張らなきゃ」と焦って失敗の連続でした。でも、今度はクスリはやらない覚悟が出来ているので、同じ失敗はしないとと思っている。“病氣”になりそうになったら、すぐ君という良き友に相談するよ、何でもネ。2月13日で私も還暦です。刑務所は定年としたいですネ。」

宇宙への入り口なるや冬の空／冬の獄誰か知り人来ぬものか

この手紙は2003年(平成15年)2月2日に発信している。これが高い塀の中から姪に宛てた最後の手紙となった。私は同年3月24日、人生最後となる刑務所生活を終えた。昔の仲間が誰一人顔を見せない中で、ただ一人迎えに来てくれたのが姪だった。手紙の中に「病氣」という文言が出てくるが、もちろん当時は依存症という認識はなかった。なので、この手紙に書いたほど藤岡ダルクに関心があった訳ではなかった…。この3年前、私は逮捕されて裁判で有罪となり7度目の下獄直前に、今は私のスポンサーでもある恩人のトムさん(坪倉洋一さん、渋谷ダルク理事)から熱心にダルクメッセージを頂いていたのに、である。(次号に続く)

稲刈りに
かり出されたる
縁者かな

みく

昔の田植や稲刈りは集落や縁者が援け合って行った。機械化された今では少人数で間に合うが、それでも近くの縁者の援けを請うたのだ。何町歩もの稲刈りかも知れない。晴れた休日などの稲刈りの景を彷彿する句で子供の頃の手伝いも懐かしい。

特選句

貧農の
五男に生れ
稲を刈る

あへ

あまり良い言葉ではありませんが、貧乏人の子沢山、があり昔の郷の頃を思います。歴史からみても農村は貧農が多く、長男以外は何処かへ働きに出たものですが、五男が田畑の仕事をするのは特別の事情かも。また戦後は主人や長男を戦争で亡くした主婦や祖父母が難儀や苦勞を超えて子育て農事に尽くした結果に今の日本があるとも言えます。切々の句です。

特選句

おだ掛けの
大子の棚田
稲を刈る

ゆたか

「おだ掛け」は稲架のこと、茨城、千葉県の方言、また大子町は袋田の滝のある山間の人口一万七千余の町で、林檎や鮎が名高い。その山の町の棚田に稲架が準備され稲刈りがされている。私の郷を思う句でもあります。

特選句



今月の秀逸句

稲刈りや
朝な夕なの
利根の風

くま

原句は少し変えましたが、これで利根川の風が稲穂になびく広い田の大景の句になります。また利根川は大河なので温度差で朝夕は良く風が吹きます。俳句は季語を一つにして景の見える様に詠むのも大事です。

稲刈りに
揃し家族
なつかしき

しま

世界の稲作は中国で一万年前、日本では三千年前頃から始まったとも言われ、その頃は家族や集落共同で田植えや稲刈りをしたと思える。現代は機械化で一人でも出来るが、テレビで見える様に家族で借りた田の稲刈りも楽しい。一句は昭和の中頃までの田舎の思い出かもしれない。

稲刈りを
眺めて思ふ
故郷かな

ひろ

句の作者の故郷は何処だろうか、私の田舎は山国で棚田狭田が多く耕しも牛や鍬、稲刈りは手刈だった。小学四年にもなると農繁休暇があり手伝いもした。この広い水郷の稲刈りを眺めながら故郷を偲び自分を顧みる、しみじみした句です。

稲刈りの
腰を伸ばすや
遠筑波

こば

この水郷地帯は早場米の産地で筑波山、霞ヶ浦、利根川沿いは田園が広がる。植田の緑も美しいが、実った稲穂の波も秋の日に黄金色が眩しい。筑波山は歌垣の山とも言いつつ東の名山で今でも多くの人が訪ねる。晴れた日の稲刈りに腰を休めて遠き筑波山を眺めるのも心安らぐ。大景の句です。

稲刈るや
手元に黄金
たれ下がる

おの

今では機械で刈るのが多いが、それでも棚田や田の狭い処は鎌で刈る。刈った手元に黄金色の稲穂が垂れて重さを感じる実感の句で、子供の頃に手伝ったのが懐かしい句です。

稲刈りや
やつた経験
まるで無し

まこ

日本人であれば米は食べるが、大半の人は田植や稲刈りの経験は無い時代でもあります。また魚漁業、林業なども知らない人が多い。歳を重ねれば米の有難さやそれらを作る苦勞にも思いをしたいと思います。

佳作

晴天や黄金色なる稲を刈る	ちやこ	頭垂れ広田に実る稲穂かな	れいこ
大切な生きる為なる新米よ	ゆうこ	稲の穂に雀の遊ぶ山田かな	みく
稲刈りを今年もやるぞ暑き中	かこ	お手上げの案山子に遊ぶ雀かな	もと
稲刈りをすれば広田も美しき	あきら	雀らが稲刈り後の虫を捕る	あべ
稲刈りや明日に白き米を待つ	かよこ	稲刈りを確と見てぬる案山子かな	ひろ
稲刈りて美味しく食べる結びかな	ゆめ	稲刈りを了へて味わふ塩むすび	こば
稲刈りの力つけたる握り飯	めい	稲刈りを了へて晩酌旨きかな	シゲ
稲刈りに忙しき里思ふかな	いるか	稲刈機鷲の従者を連れ廻る	ゆたか
新米のご飯はやはり最高ね	ぴのこ		

どっこい

私も生きてます～我が回復記～

「ガクの回復記」

この3年で実家の仕事の方も板につき楽しさも感じる



僕が潮騒を出て(卒寮して)3年になります。あっという間の3年でした。あまりにもあっという間なのだったので、(このまま社会でやっていけるか) たまに不安になりますが、潮騒のみんなを励みに何とか毎日頑張っています。僕が潮騒で入寮者として回復プログラムに励んでいた時には、早く社会に出て働きたいとの思いが強かったです。なので社会復帰に向けて、はやる気持ちをどう抑えるかが悩みでした。その頃は焦って空回りばかり…、そんな気持ちに耐えられずにスリッパしてしまっただけもありました。そのために「現物」支給になり、ますます社会が遠のく…、そんな日を繰り返していた気がします。皮肉な話ですが、そうしたアディクト特有のふるまいや自分本位のこだわりを諦め、自分の無力を認めて施設生活に専念・集中し始めた頃から、何かが変わったんです。今思えば不思議な感じですが、そうした流れの中で次第に心が落ち着き、施設で問題も起こさずに生活できるようになっていました。いや、それどころか、あのままだったら「この生活も楽しいなあ」「ずっと潮騒にいてもいいかも…」っていう気持ちになっていたかもしれません。そんな頃急に「実家のそば屋に戻って来ないか？」と家族から誘いが掛かりました。あれから3年です。とはいえ覚醒剤で壊してしまった頭は、コンピューターでいうウイルスやバグの様な状況を、たまに僕の現実にもたらしめます。そういう自分の後遺症にどう対処していくかの具体的なノウハウは、この3年でかなり身に付き、上達したかな、とも思います。そういう風に成長できた自分を褒めたいな、って思う部分もあります。これは普通の人たちにはない感覚でしょうね。笑っちゃう話ですよ。とにかくこの3年で実家の仕事の方も板につき、そこに楽しさも感じるくらいの余裕が生まれています。これって僕にとっての回復と成長ですよ。「ちゃんと生きる」って気持ちを見失っていた頃、潮騒にお世話になってプログラムに取り組み、一定の回復ができたので、もう一度元気な自分で生きようと思っています。なので潮騒には本当に感謝です。(ガク) ※ブーちゃんの回復記・第10回は紙面の都合により休みます。ご了承ください。

9月のバースデー

てっちゃん



70になりました。
親父の年を越えたい。

たけ



あせらず、一日を大切に

あず



今日一日

まさお



74 歳になりました。

INFORMATION

フォーラムに先立つパレードに参加しませんか!!

潮騒ジョブトレーニングセンター12周年フォーラム(11月23日午後12時半～4時半、鹿嶋労働文化会館)では、フォーラムに先立って「潮騒版・リカバリパレード」を実施します。リカバレは依存症や心の病、生きづらさを感じている人達が、それぞれ回復の道を歩いていることを世間にアピールするのが狙いです。当事者やその家族、友人、支援者、賛同者らが回復の喜びを祝おうと2000年から始まりました。「社会の無知・偏見を取り除くのは、私たち回復者自身の責任です!」として毎年秋に東京・新宿に集い、駅周辺の目抜き通りをパレードし、回復の喜びを自由な表現で示しています。回復途上にある当事者が胸を張って世間にアピールする趣旨に賛同し、回を重ねるごとに地方にも取り組みが拡大しています。潮騒でも栗原センター長が「いつかは地元の鹿嶋市でやろう!」と呼び掛け、今年のフォーラムで取り組む事になりました。潮騒版のパレードはフォーラム会場を出発地に市内中心部を20～30分掛けて練り歩き、再びフォーラム会場に戻るミニパレードです。鹿島アントラーズの祝勝パレードには及びませんが、ご一緒に祭日昼の鹿嶋市内をパレードしませんか?

9月の行事予定

- 9月7日 潮騒俳句会
- 9月10・16日 秋元病院メッセージ
- 9月16日 JAしおさい農産物直売所新米祭り
- 9月20日 潮騒稲刈り(潮騒水田)
- 9月24日 潮騒家族会
- 9月29日 獨協大学医学部生研修来所

10月の行事予定

- 10月5日 潮騒俳句会
- 10月8日 リカバリーパレード「回復の祭典」(新宿)
- 10月8・21日 秋元病院メッセージ
- 10月21・22日 第27回鹿嶋祭り
- 10月22日 潮騒家族会
- 10月29日 潮騒アディクションセミナー

献金・献品を頂いた方 (9月15日現在)

- ・若谷 勇 様
- ・村上 様
- ・K&G 企画 様
- ・アルファクラブ 様
- ・ひたちなか一中 様
- ・ケージコーポレーション 様
- ・常陽銀行 様
- ・高田 武義 様

今月も献金・献品をいただきました。心から感謝申し上げます。
本当にありがとうございました。

おかげさまで潮騒JTCは、回復のためのプログラムを
実践することができておりますことをご報告いたします。

今後ともご支援くださいますよう、
なにとぞ宜しくお願い申し上げます。

※その他匿名の皆様からも献品・献金をいただきました。ありが
とうございました。

※発送作業簡略化のため、振込取扱票は全員の方に同封させてい
ただいております。どうぞご理解のほどをお願いします。

編集後記という名の独り言

今年6月に開所した滋賀県の「東近江ダルク」で、殺人未遂事件が起こった(9月19日)。各メディアが報じ、ネットを通じても拡散した。報道によれば、真夜中に共同生活していた男性入寮者(41)の首を若い入寮者(27)が刃物で切り付け、現行犯逮捕された。容疑者は自ら近くの交番に向き、「生活態度が気に入らないので殺そうと思った」と容疑を認めているという。僕らが報道で分かるのは、ここまでだ▼市民感覚からすれば、「こんな事件が起こるなんて、ダルクというのはなんて危険な施設なんだ!」となるのは必然。報道する側は「依存症の回復を支援する施設だけに、あってはならない事件」と、ペンを持ったお巡りさんよろしく正義感が刺激され、ニュース価値や話題性を増幅させる。でも、ダルクの実態を知る者からすれば「ちょっと待って!」の思いが禁じ得ない▼メディアは鬼の首を取ったように報じたが、犯罪とは縁のない真人間ばかりが集まるコミュニティーならいざ知らず(そんな所はこの世にどこにもない!)、ダルクは特殊な世界ではない。むしろ社会の矛盾や現実をより鋭敏に、色濃く反省している。漂着した仲間達の多くは生育環境に問題を抱え、自己肯定感や自尊心が低く、共通して癒されない孤独感を抱えている。おまけに依存症の多様化や重複障害が多くなり、ますます回復が難しくなっている▼誤解を恐れずに言えば、ダルクでは人間関係の軋轢やいざこざはよくある日常風景の一コマに過ぎない。何しろ世間が眉を顰める個性豊かな人達が集まるだけに、僕はよく警察が介入する刃傷沙汰が起きないものだとか常々考えていた。そこに今回の事件である。もう少し詳しい情報が欲しいところだが、日々回復支援に頑張る各地のダルクや関連施設にとって痛手には違いない▼これによってダルク設置反対派は、「そらみる!」とばかりに反対運動に弾みをつけるだろう。有名人の薬物事件でもそうだが、いくら口を酸っぱくして「依存症は病気」と説いても、世間では非行や犯罪として処罰感情が先に立つ。でも、これだけは言いたい。この世知辛い世の中で、ダルクは何度でも失敗を認め、生き直しを肯定する稀有な空間である、と▼だから僕は万人を敵に回しても、ここでしか救われない一群の人々の「回復の権利」を訴えたい。(市)

潮騒通信 どっこい生きてます! 2017年9号

Contents

- P② 「干々に乱れた私の心も少しずつ秋空のように…」
- P③ 農業隊収穫期リポート(上)
～潮騒のマンパワー活かす「稲わら天日干し加工」に初チャレンジ～
- P④ デイケアの仲間が潮騒水田で稲刈り体験
手刈り作業で農家の苦勞に思いを馳せる
- P⑤ 依存症の実態と回復支援活動に理解深める
ひたちなか市の地域団体が研修で来訪
- P⑥ 近藤恒夫インタビュー 第3回
「ダルクは特定のグループにへつらわないで来れた」
- P⑧ 2017 シリーズ企画「潮騒ジョブってどんな施設なの?」
その6:「中ナイトケア施設」
- P⑨ 館山Gフェローシップ/ピアサポ祭り/えいの退寮記/夏祭り「入寮者交流会」
- P⑩ 受刑者からの手紙
- P⑫ しおさい俳壇 9月のお題「稲刈り」
- P⑭ どっこい私も生きてます「ガクの回復記」/9月のパースティ
- P⑮ 行事予定 / 編集後記 / 献金・献品 / 目次



■ 編集・発行:

特定非営利活動法人
潮騒ジョブトレーニングセンター(本部)
〒314-8799 鹿嶋郵便局 私書箱 34号
〒314-0006 茨城県鹿嶋市宮津台 210-10
TEL:0299-77-9099 FAX:0299-77-9091

潮騒アディクションビレッジ会館
(潮騒アディクション・ケアセンター)
〒314-0031 茨城県鹿嶋市宮中 4-4-5
TEL:0299-95-9991 FAX:0299-95-9992

E-メール k.s-darc@orange.plala.or.jp

ホームページ <http://shiosaidarc.com/>

